

「と」節を含む文について

—「と」節を従属度の観点から整理する—

加藤 理恵

1. はじめに

本稿の対象とする文は次のようなものである。

- (1) 早ければ十月にも、カリフォルニア大学で最初の移植実験が行われるとみられる。

(【中日新聞】(1995年8月15日))

(1)のような文に用いられる「と」は、他から聞いた話を伝える「引用のと」(砂川(1987)他)とも、補文(complement)に付加される補文標識(complementizer)(井上(1976)他)とも呼ばれる。

日本語の補文標識には「と／こと／の」があり、その三つの補文標識「と」そして「こと／の」との使い分けは、これまで動詞の意味特性の一つ「叙実性(factivity)」(Kiparsky and Kiparsky(1971))の有無によって説明されている。「叙実性」は話者が補文の内容を真とみなすという「前提」のあるものであり、そのような特性を持つ「叙実動詞(factive predicate)」は、他から聞いた話を伝える「と」と共に用いることはできないというものである(井上(1976)他参照)。

しかし、叙実動詞なので、この分析によれば「と」と共に用いることはできないはずの動詞にも次のような例が見られる。

- (2) a. O.J. シンプソンが日本における長嶋茂雄なみの人気者で、特にカリフォルニアの黒人にとって特別な人だとは後で知った。

(【中日新聞】(1995年10月7日))

- b. しかし辰子にも知られていないと判って、夏枝はひそかに安心した。

(三浦綾子【氷点(上)】角川文庫 p.269)

また、「と」しかとれないとされた動詞にも次のような例がある。

(3) 「よかった。死んでなどいやしないぞ。気絶してただけだ。」

とルリ子を抱きかかえて来ることを想像しながら走った。

(三浦綾子『氷点(上)』角川文庫p.39)

このように、「と」「こと／の」の使い分けは、「叙実性」をもってしても十分に説明できない。従って、叙実性を用いた分析には何らかの修正ないしはそれにかわる説明が必要である。そしてそれを将来的な目標とし、本稿ではその前段階として、まず「と」節内にどのような要素が表れ得るのかを整理することを目的とする。整理の結果、思考に関する動詞の場合、先行研究にとりあげられた「思う」が示す傾向と同じ傾向を示す動詞ばかりではなく、「と」節内に現れる要素は各動詞によって制限が異なることが分かった。即ち、各動詞によって2.1に述べるような「従属度」に差があること、さらに、それらの動詞の「と」節が、「発話」に関する動詞の「と」節と、「こと／の」節を両極にしてその間に連続的に並べられることを確認する。

2 先行研究とその問題点

三上(1953)、三上(1963)、仁田(1980)、寺村(1981)、砂川(1987)等に見られる分析では、「と」をとることがすでに決まっているものとしていくつかの動詞を扱っており、ほぼ次の二点にそのような動詞の特徴を集約できる。一つめには、1)のようなものがあげられる。

1)「言う」の類の動詞は「話し相手」をとることができるが、「思う」類の動詞はできない。

言う → 誰が 誰に[文]と 言う

思う → 誰が [文]と 思う

(寺村(1981:148))

二つめに、「言う」類の動詞と「思う」類の動詞には、「と」節内にどのよ

うな要素が入るかという観点からみた相違がある。

(4) *明日行きますねと思います。

例文(4)は不自然である。そのような点からみて、

2) 「思う」類の節の方が従属度が高い。

(寺村(1981:148))

ということが出来る。しかし動詞によっては、その他にも「と」節内に受けられないものがある。

(5) a. *昨日、財布はあの店で落としたに違いないと知った。

b. *そんなことはおかしいなと見た。

(5)に示すように「思う」以外、先行研究では十分に観察されていない。本稿では、2)の観点から、どのような動詞とどのような要素が「と」節内に共起できるのかを整理する。

3. 「と」節をとる主動詞

3.では、主動詞に注目する。目的の一つは、「と」節が必須要素であるかどうかを確認すること、もう一つは動詞を意味的に分類することである。動詞の意味的な分類の目的は、その分類に基づいて例示するためである。

3.1 「と」節を必須要素とする動詞

どのような動詞が「と」節を必須とするのか¹は、次のような基準で考える。必須要素を、状況についての知識による助けということが全くない場合に、ある述語にとってそれがなければその描写が不完全であると感じられるような要素(寺村(1982:82)参照)とする。例文(6)の描写は不完全であると感じられるので、「思う」は必須要素の「と」節をとるといえる。

¹ 藤田(1986)は必須の「と」節を伴う動詞と、そうではない動詞の分類に詳しい。

(6) 太郎は思った。

以下の動詞は上で述べた基準に照らしてみても全て必須の「と」節を伴うと考えられる²。

- (7) 析る、受けとめる、受け取る、映る、疑う、恐れる、思いこむ、思い違いする、思う、思われる(思える)、解釈する、考える、感じる、感じられる、感心する、がんばる、聞こえる、気づく、希望する、決まる、決心する、決定する、苦心する、誤解する、後悔する、試みる、錯覚する、悟る、知る(知れる)、信じる(信ずる)、心配する、推測する、推量する、想像する、直感する、努める、努力する、とる、悩む、望む、願う、早合点する、早呑み込みする、判断する、響く、評価する、踏む、見える、認める、見なす、見て取る、みる、予想する、理解する、分かる

3.2 「と」節を必須要素とする動詞の意味的な分類

動詞とその「と」節内に共起する要素を確認するために、代表例を選ぶべく対象となる動詞を意味の上で暫定的に分類する。分類の名称は砂川(1988b)と、中右(1994)を基にする³。

- 1 「思いこみ」：「と」節の内容と現実が異なる場合
思いこむ、思い違いする、勘違いする、誤解する、錯覚する、早合点する、早呑み込みする
- 2 「判断」：「と」節の内容がある対象について述べたものである場合

² これらの動詞は『日本語基本動詞用法辞典』に記載されているものと、「と」をとる動詞が記載されている先行研究(井上(1976)、久野(1973)、砂川(1988b)、仁田(1980)、益岡(1987)、Josephs(1976))より集めたものである。

³ 砂川(1988b)と中右(1994)は取り上げているテーマが異なる。3.2では動詞の分類に対しての名称のみを参考にしている。

映る、受け取る、解釈する、推量する、推測する、直感する、とらえる、とる、判断する、踏む、見て取る、認める、見なす、見る、予想する

- 3 「承知」：「と」節の内容を外部からの情報として受け入れる場合
気づく、悟る、知る、分かる⁴、知れる
- 4 「信念」：「と」節の内容が外部からの情報ではない場合
思う、考える、感じる、信じる、想像する、理解する、分かる⁵
- 5 「疑念」：「と」節の内容を否定的にとらえている場合
疑う
- 6 「願望」：「と」節の内容の実現を望む場合
祈る、希望する、望む、願う
- 7 「伝聞」：「と」節の内容が他者から報告である場合
響く、聞こえる、という⁶
- 8 「価値判断⁷」の動詞
恐れる、心配する、迷う、悩む、後悔する

⁴ 「分かる」の意味分析をした結果、「分かる」は多義的であり、特に次のようなものを一つにまとめて扱うのは不自然であることが分かった。従って本稿では、「分かる1」「分かる2」として区別することにした。「分かる1」は(i)のように「知ることができる」「見つかる」などと置き換えることができるものであり、「分かる2」は(ii)のように「理解する」と置き換えることができるようなものである。

(i) 市役所の総合受付の電話番号、分かりますか。

(ii) 昨日から考えているんだけど、この問題は分からないんだ。

⁵ 注4参照。

⁶ この「という」は、日本語の新聞やその他の論説文でしめくりに用いられる表現である(井上(1983:113)参照)。

⁷ 「価値判断」とは中右(1994)の「価値判断のモダリティ」の定義、「命題内容が指し示す特定の状況について情緒的反応を示したり、評価を下したりするモダリティ」(中右(1994:56-57))に基づく。

3.3 本稿の対象から除いた必須の「と」節をとる動詞

必須要素に「と」節をとる動詞ではあるが、観察の中心にはおかないものがある。3.3.1と3.3.2で対象から除いた二種類の動詞とその理由を述べる。

3.3.1 「発話」に関する動詞

- (8) 言う、述べる、語る、話す、あえぐ、叫ぶ、ささやく、つぶやく、どなる、喚く、いくるめる、脅迫する、説得する、中傷する、等

このグループは、発言という行為、あるいは発言を行うことによって影響を与えるという行為を達成するものである。これらの動詞には、発言の内容だけでなく、その言語形式をも再現するような「と」節をとることが要請されているといえる。必ずしも逐語の再現が必要というわけではないが、少なくともそれに近い形式で「と」節の内に再現されることが望ましい(砂川(1988b:21-22)参照)。そのため「と」節におこる要素に制限は無いものと考えられる。動詞の節内部の要素を観察するにあたり、発言に関する動詞の「と」節は従属度の一番低いところに位置づけられる。従って、本稿ではこれ以上の観察は行わない。

3.3.2 「記述」に関する動詞

- (9) ある、記す、書く、読む 等

(9)にあるような動詞等も、発言を表す動詞と同様、中心的な扱いはしない。

- (10) こんなところに落書きがしてある。「山田君へ」とあるよ。

例文(10)では「山田君へ」というのは落書きがしてあったとおりに読んだものだからである。以上の動詞も、「と」節がとることのできる要素に制限がないものとする。

4. 主動詞と「と」節の要素との共起関係

4.では、3.で挙げた1から4の動詞について、「思う」「考える」「判断す

る」「勘違いする」「知る」「分かる」をとりあげ、その共起関係を観察した結果を示す。○は「現れ得る」、×は「現れない」、?は不自然なことを示す。3.であげた動詞のうち、5-8は、特に動詞との共起制限が強く、「と」節内の要素はほぼ一つの型に決まっているといえるが、それについては本稿ではこれ以上の言及はしない。

判定については、主に文末のモダリティを示す要素をとりあげ、それが「と」節内に現れたときに文法的であるかどうかという点に関して行った。「ものだ」や「はずだ」など、多義的別義が考えられる語に関してはそれも考慮し、それがどのようなものであるかについては、例文をあげる。

4.1 「のだ」、「はずだ」、「わけだ」、「ものだ」、「たい形」、「だろう」

4.1では、「のだ」、「はずだ」、「わけだ」、「ものだ」、「たい形」、「だろう」をとりあげるが、このうち、多義的別義が考えられる「はずだ」と「ものだ」は以下にあげるようなものである。

4.1.1 「はずだ」

「はずだ」には二つの多義的別義が考えられる。それぞれをa)、b)に記す。

- a) 「条件から当然の帰結として予想する場合」(森田(1980:410))の「はずだ」は次のような例である。

(11) 「となりの会議室は涼しいかなあ。」
「クーラーがないから暑いはずだよ。」

- b) 「条件の真相を知って、現状が当然の帰結であったと悟る場合」(森田(1980:411))の「はずだ」は次のような例である。

(12) 「今日は暑いねえ。」
「そうだね。暑いはずだよ。38度もある。」

4.1.2 「ものだ」

「ものだ」には、五つの多義的別義がだされているが、それがどのようなものであるのか、a)からe)に順に例文を記す。

a) 「一般的傾向性」を示す「ものだ」は次のような例のものである。

(13) 数学の問題が解けた時には、満ち足りた気分に含まれるものです。

(「朝日新聞」(朝刊)(1992年5月30日)(梶山1992:19))

b) 「希望のやわらげ」を示す「ものだ」は次のような例のものである。

(14) 願わくば、この文章を読んだ人々、一冊ではなく、何冊かの国語辞書を手元に備えてもらいたいものである。

(国松昭「「国語辞書」をめぐる」竹林滋・千野栄一・東信行編『世界の辞書』所収研究社 p.47(梶山1992:22))

c) 「当為」とは寺村(1984:301-302)において「理想の姿、当為を表す」とされるもので、次のような例のものである。

(15) 通院とか、入院とかということは医者が決めることだ、病気をなおしたいのなら、医者の指示通りするものだ、(以下略)。

(山崎豊子『白い巨塔(下)』新潮文庫 p.64(梶山1992:24))

d) 「なつかしさをこめての回想」とは、寺村(1984:304)において「追想、なつかしさをこめての回想」と記述されているものであり、次のような例である。

(16) 子供のころは、毎日のように暗くなるまで外で遊んだものだ。

(梶山(1992:26))

e) 「驚き」を示す「ものだ」は次のような例のものである。

(17) いいぞ、よく観察したものだ。

(影山民夫『遠い海から来たCOO』角川書店 p.44(梶山1992:19))

4.1.3 まとめ

「のだ」、「はずだ」、「わけだ」、「ものだ」、「たい形」、「だろう」との共起関係を表1に示す。

[表1]

	のだ	はずだ (悟る)	わけだ	ものだ(一 般的傾向)	ものだ(当為)	ものだ(希望)	たい形	ものだ (回想)	ものだ (驚き)	はずだ (予想)	だろう
思う	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
考える	○	×	○	○	○	×	○	×	×	○	?
判断する	○	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○
勘違する	○	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○
分かる	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×
知る	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×
疑う	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×
望む	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×

4.2 「かもしれない」、「に違いない」、「まい」、意志形「(よ)う」、「そ
うだ」、「らしい」、「ようだ」、「は」、「な(詠嘆)」、「おお寒(感情)」

4.2 では「かもしれない」、「に違いない」、「まい」、意志形「(よ)う」、「
「そうだ」、「らしい」、「ようだ」、「は」、「な(詠嘆)」、「おお寒(感
情)」をとりあげるが、このうち、「まい」、「そうだ」、「おお寒(感情)」は
以下にあげるようなものである。

4.2.1 「まい」

「まい」には二つの多義的別義が考えられる。それぞれをa)、b)に記す。

a) 「否定的な推量(=ないだろう)」(寺村(1984:232))を示す。

(18) 今日は降るまい。

b) 「否定的な意志(=ないようにしよう)」(寺村(1984:232))を示す。

(19) あそこへは二度と行くまい。

4.2.2 「そうだ」

「そうだ」にも二つの多義的別義が考えられる。以下a)、b)に示す。

a) 「予想、予感」(寺村(1984:237))を示す。

(20) 雨が降りそうだ。

b) 「伝聞」(寺村(1984:255))を示す。

(21) 今日は雨が降るそうだ。

4.2.3 「おお寒」

この表現は、感情・感覚の直接の現れとして取り上げた。

4.2.4 まとめ

「かもしれない」、「に違いない」、「まい」、意志形「(よ)う」、「そうだ」、「らしい」、「ようだ」、「は」、「な(詠嘆)」、「おお寒(感情)」との共起関係を表2に示す。

[表2]

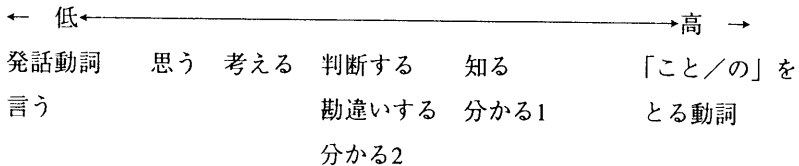
	かもしれない	に違いない	まい(否定推量)	まい(意志)	意志形	そうだらしい(予想)	ようだ	そうだ(伝聞)	主題の「は」	終助詞「な」	「おお寒」
思う	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
考える	○	○	○	?	○	?	?	○	×	○	?
判断する	○	○	○	×	×	○	?	○	×	○	×
勘違する	○	○	○	×	×	○	?	○	×	○	×
分かる	×	×	×	×	×	×	×	?	×	○	×
知る	×	×	×	×	×	×	×	?	×	○	×
疑う	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
望む	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×

5. 終わりに

以上の観察の結果、「言う」の「と節」と「こと／の節」を両極にして、思考に関する動詞の「と」節はその間に位置づけられることが分かった。結果を次の図に示す。

本稿で用いる「従属度」とは、「と」節内にどのくらいの種類の要素を許容するかといったもので、その種類が多いものを「従属度」が高いということにする。

(22) 「従属度」



「分かる」は、動詞の意味分析をした結果、多義的別義が考えられるので、本稿では便宜上「分かる1」「分かる2」として(22)に記した。

「言う」等を最も低い位置に位置付けたのは、「相手」に対する働きかけも含めて、「と」節内にとり得る要素に制限がないからである。「思う」は「ね」等、「相手」に対する働きかけの要素がとれないという点で、「言う」より高い位置に位置づけられる。

「考える」は「思う」と異なり、「おお寒」「痛い」等の、感情／感覚の直接表現がとれないという点で「思う」より高い位置に位置付けられる。

「判断する」「勘違いする」は、「考える」が詠嘆の終助詞「な」、「たい形」、「意志形」がとれるのでそれと区別した。

「知る」「分かる1」は「たい形」、「意志形」に加えて、さらに真偽判断のモダリティ要素がとれないという理由で、「判断する」「勘違いする」よりさらに高い位置に位置付けられる。

「と」節内に現れる要素については、いわゆる「真偽判断」のモダリティ要素がとれるかどうかという点が一つの基準とできると考えられる。その点に関し、「思う」「考える」「判断する」「勘違いする」はほぼ同じ傾向を示し、「知る」「分かる1」はほぼ同じ傾向を示すことが分かった。今後はこの結果をもとに、なぜある種の要素はある動詞と共起しないのかを説明していきたいと考えている。その見通しとして、次のようなことがあげられる。前述のように、思考を表す動詞が「知る」と同じ特徴を持つ動詞(「分かる1」と、「判断する」と同じ特徴を持つ動詞(「思う」「考える」「勘違いする」)の二種類にわけられるのは、思考のタイプの違いによるものであり、その二つのタイプの区別には、思考、認識の主体内部で行われる活動及びそれによってできる思考内容が関わっていると考えられる。

<引用文献>

- 井上和子. (1976) 『変形文法と日本語(上)』大修館書店.
 井上和子. (1983) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』12巻11号. pp. 113-121.
 久野 暁. (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
 小泉 保編. (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.

- 砂川有里子. (1987) 「引用文の構造と機能——引用文の3つの類型について——」
『文藝言語研究・言語編』13号. 筑波大学文芸・言語学系. pp. 73-91.
- 砂川有里子. (1988a) 「引用文の構造と機能(その2) ——引用句と名詞句をめぐって——」
『文藝言語研究・言語編』14号. 筑波大学文芸・言語学系. pp. 75-91.
- 砂川有里子. (1988b) 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7巻9号.
pp. 14-29.
- 寺村秀夫. (1981) 『日本語の文法(下)』大蔵省印刷局発行.
- 寺村秀夫. (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 寺村秀夫. (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 中右 実. (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 仁田義雄. (1980) 『語彙論的統語論』明治書院.
- 藤田保幸. (1986) 「文中引用句「～ト」による「引用」を整理する——引用論の前提として——」宮地裕編『論集日本語研究(一)現代編』明治書院. pp. 206-230.
- 益岡隆志. (1987) 『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版.
- 益岡隆志. (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 三上 章. (1953(=1972)) 『現代語法序説——シンタクスの試み——』刀江書院. (くろしお出版).
- 三上 章. (1963) 『日本語の構文』くろしお出版.
- 糴山洋介. (1992) 「文末の「モノダ」の多義構造」『名古屋大学言語文化部言語文化論集』16巻1号. pp. 19-31.
- 森田良行. (1980) 『基礎日本語辞典2』角川書店.
- Josephs, L.S. (1976) "Complementation." In Masayoshi Shibatani, ed. *Syntax and Semantics*, 5. New York : Academic Press. pp. 307-369.
- Kiparsky, P. and Kiparsky, C. (1971) "Fact." In D.D.Steinberg and L.A.Jakobovits, eds. *Semantics*. Cambridge : Cambridge University Press. pp. 345-369.